

特集論文

長期議会における宗教と政治

—スティーヴン・マーシャルの議会説教の分析を中心に

松谷 好明 (聖学院大学総合研究所)

I. 本論文の課題

今日、1640-60年のイングランド史において中心的な役割を果たした長期議会の宗教性について再び関心が高まっている¹⁾。長期議会が関わった宗教関連の課題は膨大かつ多岐にわたるが、長期議会がほぼその開始から終焉にいたるまで実施した月例断食日、特別感謝日、特別謙卑日における説教者による議会説教は、同議会の宗教性を解明する上でとりわけ肝要である。なぜなら、ホブスは『ビヒモス』において、1640-60年の社会的無秩序の最盛期をもたらしたのは説教壇から反乱を説き国民の腐敗と誘惑、権威と権能の完全な崩壊をもたらしたのは、プロパガンディストたる「キリストの牧師」だとして特に「長老派」を槍玉に挙げ²⁾、クラレンドンは『大反乱史』において、ジョン・ピムを始めとする議会指導部が説教者たちを目的達成の手段として利用したと糾弾している³⁾が、これらの議会派説教者たちのいわゆる「政治的説教」(political sermon)が典型的になされた場が議会説教だったからである。

こうした議会説教の先駆的研究の中で特に重要なものは、H.R. Trevor-Roperの著書*The Crisis of the Seventeenth Century* (Harper & Row, 1956) 所収の論文*The Fast Sermons of the Long Parliament*と、その論文を踏まえたJohn Wilsonの著書*Pulpit in Parliament* (Princeton University Press, 1969) である。本論文において我々は、長期議会の多くの説教者の中で最も長期にわたり、最も多くの説教をして「議会の説教者」と呼ばれ、それゆえにホブス、クラレンドンの批判の対象となったばかりか、王政復古後その遺体がウェス

トミンスター・アビーの南側廊から掘り起こされて外の穴に投げ込まれた「長老派」の代表的な牧師Stephen Marshall (1594-1655、エセックス州フィンチングフィールドの牧師) の説教(議会説教15篇とロンドン市説教3篇の計18篇)⁴⁾の分析を通して、以下の3つの問いに答えることを試みたい。

第一に、マーシャルに代表される議会説教者たちにおいて、言われるような宗教による政治への介入、扇動が起こっているか、である。すなわち、説教者たちは、クラレンドンが言うように長期議会指導部に戦略的(長期的目的を明確にする)、戦術的(一時的な政策転換を開始する)目的のために利用され、操作されて、政治的プロパガンディストとして働いた、とするトレヴァー・ローパーの見解をどう評価するか、また、内戦期のピューリタン牧師の政治的説教の内容と意義が国内政治情勢の変遷と、それに基づく議会と説教者との関係の変化により変動してゆき、ホブスが見るほど一様でも一面的に破壊的でもなかった、とするウィルソンの見解をどう評価するかである。

第二に、マーシャルについて言えば、彼は常に勝ち馬に乗る生き方のために仲間(長老派、スコットランド側、議會長老派、兵士を含む議会軍の順で)と分かれることを繰り返し、結局最後は独立派・グランディーズのオリヴァー・クロムウェルに付き国王処刑と水平派弾圧まで支持した、とその変節と孤立化の過程を強調するトレヴァー・ローパーの見解をどう評価するか、である。

第三は、「すべての主教派が大主教Ussherと同

長期議会における宗教と政治—スティーヴン・マーシャルの議会説教の分析を中心に

じ精神であり、独立派がJeremiah Burroughs氏のように、長老派がStephen Marshall氏のようにであれば、教会の分裂はいやされていたであろう」(バクスター)⁵⁾は、マーシャルに関するかぎりの程度妥当するか、である。

II. 本論 マーシャルの説教内容の分析

マーシャルの議会およびロンドン市説教は、国内の政治的、教会的状況に応じてテキストの選択が行われたので、説教内容の分析に当たって我々は、「危機の20年」の歴史的状況を便宜上4期に分けて、それぞれの段階でなされた幾つかの説教をまとめて取り上げることにする。その際本論文の狙いは、「長期議会における宗教と政治」の分析を通して「ピューリタン革命の宗教思想」(ピューリタニズム学会2012・6の研究大会テーマ)を明らかにすることにあるので、聖書のテキストおよびコンテキストそのものについてマーシャルがなした解釈、解説よりも、むしろ具体的状況への「適用(用益)」⁶⁾に焦点を当てたいと思う。

1) 第1期…議会召集～内戦開始前(1640-42)

我々が利用できるこの期のマーシャルの説教は3篇のみであるが、いずれも彼の信仰と神学を明確に打ち出した、これ以降の彼の説教のひな型となるものできわめて重要である。

スコットランドとの和平感謝日になされた庶民院説教「神への和解の献げもの」⁷⁾(41.9.7)においてマーシャルは、過去80年間、神が教会と国家両面においてさまざまな顕著な憐れみを注いで多くのくびきを取り除いてくださったが、我々の神に対する忘恩、感謝のなさのため、過去2、3年イングランド、スコットランドは、「邪悪な道具たち」の悪意と実践で財産、自由、宗教が混乱と危機に陥っていた、とする。しかし、この1年の間に神は「数々の驚くべき御業」を行われたとして、①両国民が戦争から愛の絆に結ばれた関係に入ったこと、②星室庁、高等宗務官裁判所の廃

止により、財産、自由、宗教、良心のくびきが除かれたこと、③イングランド議会両院が、教皇制とその残滓を廃して真の宗教を守る誓約をしたこと、④国王と議会が3年議会法について一致したこと、などを具体的に列挙した。

かくしてマーシャルは、個人、家族、国全体で神をほめたたえとともに、信仰と生活を聖別するように奨励し、またこう警告もする、「諸君は今や自分自身の家を建て、市民的自由(Civil Liberties)を獲得した。万一神の家を荒れたままにしておき、神の大義のためにあまり熱心でなければ、神は諸君と子孫の手から結果をお求めになる」と。

第二の庶民院説教はアイルランド危機のためにもたれた特別謙卑日(41.12.22)になされたもので、「宗教改革と荒廃」⁸⁾というタイトルの下になされた。この中でマーシャルは列王記下23:25、26からユダの王ヨシヤのような宗教改革を進めた王がいたとしても王マナセと民のたいなる罪によって燃え上がった主なる神の怒りは容易に消えなかったことを想起させ、イングランドの国民と国家の現状(神の戒めに背いて決定的な破滅に陥る瀬戸際にある)に全国民が嘆き悲しむこと、特に国会議員は、神に背く者たちに正義を行い、報復するとともに、宗教と神礼拝の改革を一層進めるように強く促した。マーシャルは最後に、「諸君は我が国を代表する人々である。我々を救ってほしい」と叫んでいる。

第三に、庶民院説教「メロズはのろわれよ」⁹⁾(42・2・23)はマーシャルの説教中最も有名なもので、その後多くの版が重ねられて広く読まれたものである。アイルランド・アルスターでの反乱と大虐殺のニュース、大抗議文(204ヶ条)の可決、国王の5議員逮捕失敗とヨークへの逃避、議会における主教排斥法の成立、といった激動の中でもたれた、第一回月例断食日における説教である。この説教においてマーシャルは、士師5:23から〈神の大義〉に反対し、「教会の敵」を助ける人々やどっちつかずの「中立者」(Newters)

特集論文

は「メロズ」に当たる人々である、とした。そのうえでマーシャルは、プロテスタントからカトリックに改宗したナヴァール国王(仏王アンリ四世)を例にあげて警告し、むしろすべての人々、特に議会議員は「楽しみを苦しみに、喜びを危険に、利得を出費に、家を宿舎に代え、これらすべてにおいて自己否定を続け、神の教会の大義のために不屈の努力をなせ」と奨励した。このときマーシャルの念頭にあったのは、宗教改革の先駆者であったドイツの長期にわたる艱難である。イングランド、スコットランド、アイルランド3国の危急と暗黒が悪化してドイツのようにならぬように、とマーシャルは女王メアリーの殉教者ジョン・ブラッドフォードに倣い、「祈れ、祈れ、祈れ」と訴え、「祈らないことで教会と国家の裏切り者とならぬように」、と強く勧めて説教を閉じている。

2) 第2期…第一次内戦期 (1643-46)

42年8月から始まった内戦の初期、議会側は、軍がエッジヒルの戦いで苦戦、43年6月には議会およびロンドン市完全転覆の陰謀が発覚、43年12月には議会の指導者ジョン・ピムが死去するなどしてきわめて形勢不利な中にあった。このような状況の中でマーシャルは、まず、ピムの葬儀説教(43.12.15 議会両院と神学者会議の合同開催)「スレーノーディア(嘆き)―人物喪失に対する教会の嘆き」¹⁰⁾において、次のように説教した。すなわちマーシャルは、「最も卓越した有用な人々が、教会がどうしても失いたくないときにしばしば取り去られる」、「神がこのようになされるとき、それは悲しい嘆きとなる事柄である」という二つの教理を立て、そこから「いかに優れた人々であったも、教会は決して人間に依り頼まないように」、「我々の危険は議会、軍、財、人々の心を過度に評価することである」として、スコットランドの軍事的援助についてさえもそうだと警告した。そのうえでマーシャルは、ピムが「真のキリスト者、イエス・キリストの忠実な僕」であり「公共精神の人」、「最も有用な人」であっただけでなく、死が近づいたとき彼が「国王陛下とその子孫のため、

議会のため、公共の益のため、自分自身が主の喜びの中に迎え入れられるため」ますます祈りをあつくしたことを思い起こさせた。そして最後にマーシャルは、神と祖国、宗教改革の大義に生きたピムの模範に倣って神に栄光を帰すように、と訴えた。

次に議会とロンドン市転覆の陰謀が発覚したことへの感謝をささげる庶民院の特別断食日の説教「神の僕モーセの歌と小羊の歌」¹¹⁾(43. 6.15)においてマーシャルは、「反キリスト派」に対してはキリストご自身が「道具」(み心に適う人々や議会)を用いて神の怒りを注いで必ずキリストの教会に喜ばしい勝利をもたらしたもうと、大陸諸国における宗教改革が多大な犠牲を払っても進展していることを例に挙げて励ました。

またマーシャルは、神聖な同盟と契約の締結に基づきスコットランド契約軍が南下するに当たっては、イングランド、スコットランド双方の代表者たちに、神がお与えくださった「心の協調と一致」に感謝しつつ、宗教の改革という共通の大義のために各々の立場で力を尽くすよう励ました(44.1.18「神聖な賛辞」¹²⁾)。

しかし、その一方でマーシャルは、神の憐れみにより議会軍がオックスフォード周辺では勝利したものの、西部、北部で大敗していることには原因があるとして、国中至るところに見られる偶像崇拜、姦淫、流血、忘恩、分裂、神に対する生ぬるさなどを真剣に悔い改めるよう強く求めた(44. 4. 2 ロンドン市説教「国を救う神の計画」¹³⁾)。

44年12月の両院特別断食日にマーシャルが行った説教は、出版に回されなかった。これはマーストン・ムーアの戦い、ニューベリーの戦いを通して台頭したクロムウェルをはじめとするテート、ヴェインらの独立派を中心とする「革命派」と「和平派」とに議会が分裂したことが背景にあると考えられる¹⁴⁾。

さて、内戦がようやく議会側に優勢となった45

長期議会における宗教と政治—スティーヴン・マーシャルの議会説教の分析を中心に

年3月、マーシャルは、まだ一定の力を保っていた貴族院の月例断食日に招かれ、「神の傑作」¹⁵⁾と題する説教を行った。この中でマーシャルは、コモンウェルスにおける市民国家の建設とシオン（神の教会）の建設とを峻別し、前者は国家の手に委ねられ、自然の光と人間の思慮分別によって導かれるが、後者は宗教の問題であって、ただ霊的、天的な規範である神の言葉の光によってのみなされるとしたうえで、しかし、その神の言葉が教会建設の継続のために貴族院議員を含む為政者に与えている権能と権威はきわめて大きい、と説いた。それは、「教会の清めと改革」（教皇制と異端を除いて神の全規定の正しい樹立を図る）のための権能と権威だとしてマーシャルは、「我らの宗教と自由のためのこの巨大な抗争」の中で見てきた実りを覚えつつ、新たな思いで「シオンを改革し、建てよう」、と呼びかけた。（…は筆者による）

同じくシオン建設についてマーシャルは、その1ヶ月後の庶民院説教「強き助け手」¹⁶⁾では、より強い危機感の中から語った。すなわち、議会側は国王とアクスブリッジ交渉に失敗しただけでなく、辞退条例をめぐる内部対立が拡大の一途をたどっていたからである。マーシャルは、我らの罪のゆえに「教会と国家の至るところに分裂と再分裂があり、我々自身の間に不平と分裂がある」、この事態は「その生活と陰険な策謀でシオン建設、宗教改革の仕事を停滞させる人たち」、「忌むべき偽善者」である敵に利用される、これを防ぎ勝利するためには「力強い助け手」である祈りによるしかない、したがって、再び「祈れ、祈れ、祈れ」、と叫んでいる。

それから1ヵ月半後の45年6月14日、議会軍はネーズビーの戦いにおいて大きな勝利を収めた（総司令官トマス・フェアファックス、主な活躍を見せたのはニューモデル・アーミー）。議会両院とロンドンの合同特別感謝礼拝（6・19）における説教「シオンに対する神の憐れみの神聖な記録」¹⁶⁾においてマーシャルは、民の状態がきわめて低調であったにもかかわらず、その民の祈りに

応えて神が予期せざる勝利と憐れみをたまわったことを感謝し、「なしうる限りの称賛と栄光を我らの主イエスに帰し、後の世々の世代に語り伝えよ」と説いた。しかし、この説教の途中でもマーシャルは、議会側に立つ者たちが「我らの肉の武力〔軍〕」を高くしがちであり、「国民のプライドがなお低くされていない」と警告することを忘れなかった。

45年の前半から46年後半にかけては、教会の戒規権の所在をめぐる議会（エラストス主義）と神学会議（長老主義）の対立¹⁸⁾、内戦終了に伴うイングランドとスコットランド、イングランド議会と軍、軍内部の士官クラスと兵士の対立の中で、議会側には戦争の大義をめぐる解釈の相違や不信、動揺が見られるようになった。こうした状況の中で46年10月28日の貴族院月例断食日に説教した（「ちのみごの口から両刃の剣」）¹⁹⁾マーシャルは、「内戦が終わったので現在の議会軍を解散するのがよいかどうか」という政治上の論争に自分は加わらないと明言しつつ、しかし「みどりごとちのみご（詩8：2）」の兵力は決して解散してはならない、と訴えた。「みどりごとちのみご」は肉の武力を持たない聖徒たちであり、彼らの口から出る敵を倒す霊的な兵力は説教、信仰の告白、詩篇歌、祈り、神との契約締結から来る、と言うのである。マーシャルがここで霊的兵力の堅持を唱えた理由は、「アイルランドは悲惨な状態にあり、イングランドは嘆かわしいほどに不安定であり、恐るべき分裂が至るところにある」、という危機意識からだった。もっともマーシャルは、聖徒が一人の人、臣下、自由人としては不当な暴力に対して自らと他の人々を防衛する手段を持ち、それを使用することは自然と国家の法により合法的である、と伝統的、正統的な見解を述べている。この点も看過すべきではない。

46年12月の庶民院断食日（12・30）説教においてマーシャルは、「時勢に対する正しい理解」²⁰⁾を持つ人は少ないと断言し、議員たちに時勢を正しく認識するようにと迫った。マーシャルは、「神

特集論文

はこの1千年間になかったほどの今の時代に我々を置いておられる」と述べたうえで、「この時代の真の様相」は、①桁はずれの邪悪と恐るべく忌まわしいこと〔不義、不正、不道德〕が行われている、②恐るべき誤謬（異端、神聖冒瀆）が神の民の間にある、③主の大きな怒りが現われている、④恐るべき戦争（不自然で血なまぐさい）の時代である、⑤分裂（「キリスト教世界でかつてなかったほどの分裂である。……最悪なのは、これまで共に祈り、共に断食してきた神の民、神の僕たちの間での分裂である」）の時代である、⑥宗教改革の時代である、⑦救出の時代である、と列挙し、これらすべての面での庶民院議員の奮起を促した。我々は⑥の項目の中でマーシャルが、「諸君は宗教改革をすでに始めている。宣誓と契約でそれに従事している」、「宗教改革を継続しなければ、神の怒りをさらに買う」、「宗教問題を解決せずして、コモンウェルスの問題は決して解決できない」と明言していることに特に留意したいと思う。

3) 第3期…軍と、独立派中心の議会の時期 (1647-48)

47年、軍の台頭と、軍内部における軍幹部と兵士の対立は進行し、ついに10月28日から11月1日の〈パトニー討論〉となった。48年にはチャールズ一世の再逮捕、第二次内戦(4-8月)、国王裁判をめぐる論争と対立があり、12月6日にはプライド・パージによる長老派議員の追放、独立派議員100余名のみによる残部議会の成立と、激動が続いた。この間、神学会議は先に提出していた礼拝指針、教会政治規程に続き、諮問されていた信仰告白、大小教理問答を相次いで議会に答申した。しかし、庶民院はエラストス主義を一層前面に出し、それらの答申をそのまま受け入れるのではなく、証拠聖句を付ける要求をしたり、独断でそれらへの改訂や削除を図って、神学会議、スコットランド教会との懸隔を広げるに至った²¹⁾。

さて、47年8月ロンドンでは一般大衆による議

会への批判、不満が高まり、議会への乱入と実力行使による議員追放という事件が起こったが、軍がロンドンに入り暴動は流血なしに鎮圧された。「議会両院が名誉と自由を回復した神の限りない憐れみ」をたたえる両院感謝日(8・12)の説教²²⁾に招かれたマーシャルは、国王と議会、議会とロンドン市、ロンドン市と軍との間の相違を広げ、分裂を図ろうとしている人々がいると批判し、むしろそれらの間に信頼と平和を築くようにと訴えた。この中でマーシャルは、公的安全、自由、宗教の保持などが剣以外の方法では不可能な場合、戦争は合法的で必要なことがあるとしながら、①戦争は重大な裁き、大きな天罰である（たとえ双方に対してではなくとも、少なくとも一方にとって）一過去何年もの間我々は多くの戦争を経験したが、戦争の実態は「エデンの園のような地が荒涼たる荒野になる」悲惨なものであることを覚えなければならない、②内戦はより大きな裁きである、③同じ宗教を告白する兄弟同士（神の民）の戦争は最大の裁きである、として、議員たちに、今回味わった侮辱と軽蔑を反省材料に、主なる神の関心事は宗教であるから「宗教を最大の関心事とせよ」、「王国に真理、平和、一致を樹立するよう力を尽くせ」と訴えた。

こうした訴えにもかかわらず、軍、特に兵士の台頭は多くの独立派、セクトの宣伝・文書活動の活発化を伴い、ロンドンを中心に国内の宗教事情は混沌の度を増していった。そのためマーシャルは、「イングランドは我らの目には死にかかった、ひからびた植物のように見える」、「主の怒りはイングランドからまだ取り去られてはいない」、と嘆きと苦悩を言い表わした。マーシャルは、New Lightsとかnew Gospel discoveriesを誇り、従来の説教者と信者は全員、律法的人間、道徳主義的人間であるとして軽蔑する、そのような異端的、冒瀆的な人々を黙過せず、議員たちは自ら手をあげて至高の神に誓った神との契約を遵守して、国にいやしをもたらすよう勧告した（48年126日の庶民院月例断食日説教）。

長期議会における宗教と政治—スティーヴン・マーシャルの議会説教の分析を中心に

第二次内戦中の48年5月17日、南ウェールズにおける議会軍の勝利を神に感謝する庶民院の特別礼拝の説教²³⁾に招かれたマーシャルは、「勝利をもたらすのに用いられた道具が愛情において我々と分かれている人々〔独立派、平等派の将兵〕であるため……神の与えてくださった救出と憐れみへの称賛、評価」ができない人々がいると指摘して、「インマヌエルなるキリストご自身が思いがけない仕方御業をなさるのである」と強調し、そのような人々を宥めようとした。そのうえマーシャルは庶民院議員たちに、「今日は一つの派を喜ばせるために一つのことを票決し、別の日にはもう一つの派を喜ばせるために別のことを票決する」といった行動を止め、初心を貫き、インマヌエルの大義に生きよ、と迫る。この説教の結びは、異様なほどの熱を帯びる。「諸君が災難のときにいと高き神に手を挙げて厳肅に誓った幾つもの誓約と契約 (Vowes and Covenants) を振りかえってみよ。信仰と礼拝と統治の問題で、諸君がどれほど多く宗教についての約束をなしたかを思い起こしてほしい」、とマーシャルは言う。そして、議員たちに「インマヌエルの大義とその御国を前進させる目的に、諸君の全計画を一致させるべきである」と訴え、「インマヌエルは、ご自分に抑制や法を課すアジテーターを自らの軍隊〔インマヌエルの大義につく人々〕の中に持とうとはされない」と言い切ったのである。

この説教をしてから2ヶ月後、まだ第二次内戦(国王・スコットランド軍と独立派・平等派軍との間の戦い)が終わっていない48年7月26日、マーシャルは再び庶民院に招かれて説教した。その後もマーシャルは53年までの間4回庶民院で説教しているが、庶民院が出版を命じた説教はこの「心の頑なさの罪」²⁴⁾が最後となった。この説教は最初にして最後の例であるが、庶民院に対して献げられていない。代わりに、「いとも敬虔なレディー・トレヴァー—我が最も尊敬すべき、すばらしき友、ジョン・トレヴァー卿の妻—へ」献呈されている。ジョン・トレヴァー卿(1626-72)は穏健派の庶民院議員のリーダーの一人だったが、そ

の夫人にマーシャルが庶民院説教をいかなる理由で献じたのかは分からない。ただ、マーシャルが説教の冒頭で、「主に在って愛する諸君、きょうこの仕事につくはずだった説教者の一人について何か間違いがあり、このような奉仕にふさわしいよりも短い期間の通告で今わたしがここに立つことになりました」、と述べていることと何か関係があったのではと推測される。

この日マーシャルはゼカリヤ7:12から、「神に対して心を頑なにする罪は、完全な破滅の確かな前触れである」という教理を立て、①神の戒めを従順に守らない、②無感覚な心、③悔い改めのなさ、④忠告、助け、手段の拒否、⑤罪の裁き、天罰への嘲笑、軽蔑、⑥自分たちを妨げる人々をすべて敵とみなして反対する、といった「心の頑なさをもつ罪人に自分が属さないかどうか」、各自吟味するよう求めた。しかし、それに留まらずマーシャルは、「神の怒りは我々に向けられている」として、国王軍と議会軍の戦いの再開(第二次内戦)、王党派と議会派の対立、艦隊の反乱、同盟と契約に反する相手側への侵略〔クロムウェル軍のスコットランド侵攻を指す〕などを挙げて「イングランドの惨めな状況を嘆け」と叫び、「イングランドの大半は主なる神に反逆し、町々村々にはあらゆる罪が蔓延、月例断食は全く形式と化している」、と糾弾した。「この説教でイングランドに対して語られたことを、イングランドのための祈りに変えよう」と訴えてマーシャルは説教を終わるが、さしもの彼にも希望の色は薄くなっていたように思われる。

庶民院説教のすぐ翌日(48・7・27)マーシャルは、ロンドンの特別感謝礼拝²⁵⁾に招かれて説教した。これは「最近の議会側の大勝利と救出」に感謝するための礼拝だったが、その中でマーシャルは、これらの勝利を喜ぶとともに、「我々の心がキリストと彼の教会に対して正しくあるかどうか、よく吟味するように」求め、「シオンの荒廃に安穩としていてはならず、また、バビロンの荒廃を悲しむことを拒むように」と勧告したのだ

特集論文

った。

4) 第4期…チャールズ一世処刑以降 (1649-52)

国王処刑の翌日(49・1・31)マーシャルが貴族院の月例断食日に説教したことは知られている²⁶⁾が、その説教は出版されなかったから、内容を知ることにはできない。また、独立派議員のみで構成された庶民院はこの時期、ヒュー・ピーター、ジョン・オウエンら独立派牧師を多く説教に招き、彼らの説教を次々に出版するようになった。マーシャルら神学者会議主流派からは招かれることが少なくなり、たとえ招かれたとしてもそれらの説教は出版されなくなった²⁷⁾。この時期のマーシャルの説教で我々が手にすることのできる唯一のものは、1652年4月のイースター・マンデーにおけるロンドン市恒例の記念礼拝の折のものである。我々にとってマーシャル最後の説教である。説教題の「頭なるキリストとの聖徒の一致」²⁸⁾は、まさしくこの時期、彼の晩年の切実なる希求と祈りを言い表わしていると言えよう。

ロンドン市長および市参事会に対する「献呈の辞」においてマーシャルは、「我々すべてに対して破滅を脅かす教会分裂の炎を消す手助けをした」というわたしの切なる願いが、わたしにこの主題の研究を課した」、と明言する。そして説教の初めの部分でマーシャルは、「教会全体、すなわち、全聖徒の集合体(collection)ないし集成体(aggregation)はキリストにあって一つの体であり、キリストはその体の頭、全聖徒はその肢体である」という全体的教理を立て、このキリストの「教会の一致(一体性)」の教理は、「無数の分派と集団に引き裂かれて、分裂(schism)が流行病となっている」現状の罪性を明らかにする、と言う。そしてマーシャルは、「分裂の罪に責任がある人々」を「誤った判断の原則から分裂の罪を犯す人々」と、「腐敗した心と精神から分裂の罪を犯す人々」とに分けて、それぞれを詳しく論ずるが、我々にとってより重要なのは前者である。(後者に入れられているのは、自己愛の人、高慢・

無礼な人、喧嘩好きな人、等々である。)

マーシャルが前者に分類するのは、①個人であれ連合体であれ、自らを完全な市民国家やコモンウェルスのように見なし……他者すべてに対して説明責任を一切認めない独立主義(マーシャルは、キリストの全体教会との関係と交わりを保っている独立派の人々はこれに入らない、として明確に区別する)、②自らの教会秩序と連合以外の他のすべての集まりをキリストの教会でないと非難する人々(自らの信仰告白、礼拝様式、教会統治方式を絶対化し、それと異なる人々と交わらない人々)、③信仰と生活の面で〈根本的〉(fundamental)ではない何か具体的な誤りや弱さのゆえに、交わりを拒否する人々、の3者である。③の根本的な誤りを犯しており、キリスト教会として認めがたいのは、今日のヨーロッパではソツツイーニ主義者と教皇主義者のみで、他のすべての人々とは、その生活が非難すべきものでないかぎり交わりを拒むべきではない、とマーシャルは言う。それでは「ルター派」、「反安息日厳守主義」、「再洗礼派」に寛容(toleration)を与えるのか、という予想される反論に対してマーシャルは、為政者の職務が寛容、非寛容についてどうあるべきかという問題に自分は介入しないとしたうえで、「寛容」という言葉によってこれらに対する「支持」(approbation)を意味するのであれば、キリストの教会としては断じて反対である、と自らの立場を明確にした。

最後にマーシャルは、第一に分裂を嘆くこと、第二にそのいやしのために祈り、自分たちの原則、愛情、精神をよく吟味し、「互いに愛し合い、互いに平和を保つことに熱心に努めよ」と強く勧めて説教を閉じている。

III. 結論

以上のようなマーシャルの説教内容の分析に基づき、我々は最後に、I. 本論文の課題で提起した3つの問いに回答を試みることにする。

長期議会における宗教と政治—スティーヴン・マーシャルの議会説教の分析を中心に

第一の問いは、マーシャルにおいて宗教による政治の介入、扇動が起こっているか、また、トレヴァー・ローパー、ジョン・ウィルソンの結論をどう評価するかである。まず、マーシャルにおいて宗教による政治への介入、扇動といったことは起こっていない、と端的に答えるべきであろう。そもそもマーシャルが国王の参加禁止命令に反して長期議会の召集に応じて神学会議に参加したのは、議会とその宗教問題への取り組みに〈神の大義〉、〈インマヌエルの大義〉があると確信したためであるが、神学会議は議会の諮問機関にすぎず、神学会議から選ばれた議会説教者は庶民院に関するかぎりすべて議会が決定し、その出版も議会の意向次第だったから、長期議会の全期間にわたり、マーシャルら説教者に主導権はなく、その役割は副次的、奉仕的だったと言わねばならない²⁹⁾。国家と国教会の柱である主教制と祈祷書、星室庁、高等宗務官裁判所の廃止も、議会が決定したことであって、マーシャルら牧師、神学者が決定したことではない。内戦期のみならず長期議会の全期間と王政復古にも重大な意義をもつスコットランドとの厳粛な同盟と契約の場合も、マーシャルの役割はチャプレンもしくは助言者のそれであって、責任主体は議会である。その意味でトレヴァー・ローパーが基本的に肯定する、『大叛乱史』のクラレンドン伯の有名な言葉、「疑いもなく、カンタベリー大主教が、マーシャル氏とバージス博士が議会両院に対してもったほど大きな影響力を宮廷側の諮問会議に対してもったことは決してなかった」³⁰⁾は、明らかに誇張であると言わねばならない。

こうした角度からマーシャルの全議会説教、ロンドン市説教を振り返って見ると、①マーシャルは具体的な政策の提示や、政治的、軍事的論争への介入を一切試みてはいない、②彼の唯一、最大の関心は、宗教改革を徹底してイングランドに真のキリストの教会を樹立することであり、しかもそれは議会自身が繰り返し誓約したことであるため、その〈大義〉を決して捨てないようにと、うまずたゆまず説いた、③マーシャルはこの観点か

ら議会、さらにはクロムウェルの政策あるいは無策を大胆に指摘し、ときには批判しているから、決して議会やクロムウェルの単なるプロパガンディストではなかった、④マーシャルが行ったのは、単なる扇動のことば、アジ演説ではなく、聖書テキストに基づく講解説教によってであった。確かに、講解説教とはいえ具体的な問題、状況への「適用」(用益)においてはきわめて効果的な強調法、反復、反語、断定的表現が多数用いられたが、それを扇動やアジ演説のことばと取ることは困難である。マーシャルはその全奉仕を、出版された全説教の扉に記したように、「フィンチングフィールドの(福音に仕える／神の言葉に仕える)牧師³¹⁾」として行なっていた、と言ってよい。

第二の問いは、マーシャルの変節とその結果としての孤立化を強調するトレヴァー・ローパーの見解の妥当性についてである。確かにトレヴァー・ローパーやウィルソンが指摘するまでもなくマーシャルは当時から「(長期) 議会の説教者」として広く認められる存在であり、その議会説教は長期議会の当初から残部議会末期の前後13年にわたって行なわれた。しかし、我々が詳しく見た通り、マーシャルの説教内容は基本的に同一であり、彼がその全説教を通じて強調したのは要するにイングランドにおける宗教改革の徹底(神の大義、インマヌエルの大義)であった。言うまでもなく、イングランド教会は国教会であったから、マーシャルの宗教改革推進への期待はどこよりも議会に向けられ、やがて議会の変質とともに独立派指揮下の軍、更にはオリヴァー・クロムウェル個人へと向けられて変遷を重ねたが、それはトレヴァー・ローパーが言うように勝ち馬に乗ろうとするマーシャルの生き方から来るというよりも、むしろ、激変する政治的、社会的状況の中でのマーシャルが宗教改革の徹底・推進を一貫して追求したがための孤立化と見るべきではないか。つまり、彼の立場が変化を重ねたというより、宗教改革の徹底というまさにピューリタニズムの確信がマーシャルにおいて典型的に最後まで堅持された、というのが我々の見方である。

特集論文

第三の問い（教会分裂とそのいやしに関するバクスターの見方の妥当性）については、然りと否をもって答えなければならない。なぜなら、一方において、いわゆる長老派神学者の中でもマーシャルは、特に52年4月に出版された最後の説教「頭なるキリストとの聖徒の一致」に典型的に見られるように、きわめて協調的、調停的であった。議会の要請により、義理の息子である独立派のフィリップ・ナイと共にスコットランドに使いしたこと、あるいは、繰り返し議会と国王との和平交渉にチャブレンとして同行したことからも、そうしたマーシャルの姿勢が広く評価されていたことが伺われる。

しかし、他方、国教会内に分裂が起こったこと、そして国教会外に数多くの分派が^{そうせい}簇生したことには歴史的、宗教的、政治的、経済的な諸原因があり、マーシャルら牧師、神学者の姿勢次第で解決できるものではなかった。したがって、バクスターの言葉は軍と諸セクト台頭以前はともかく、以後には全く当てはまらないと言わなければならないだろう。52年4月の説教「頭なるキリストとの聖徒の一致」の結びの言葉、「互いに愛し合い、互いに平和を保つよう熱心に努めよ」は、マーシャルの〈白鳥の歌〉として我々に、むしろ、自責と悲哀の念を引き起こす。今日に至るも、キリストの教会は分裂に苦悩しているからである³²⁾。

（本論文は2012.6.16 日本ピューリタニズム学会研究大会シンポジウム「ピューリタン革命の宗教思想」において発表した論文に加筆訂正を加えたものである。2012.12.5 記）

【注】

- 1) John Coffey and Paul C.H.Lim, ed., *The Cambridge Companion to Puritanism*, 2008 を参照。特にPart I とPart III。邦語文献では2012年7月に出版されたばかりの岩井淳編『複合国家イギリスの宗教と社会—ブリテン国家の創出』（ミネルヴァ書房）が特に注目される。
- 2) John Wilson, *Pulpit in Parliament*, Princeton University Press, 1969, p.3の引用から。
- 3) H.R. Trevor-Roper, *The Crisis of the Seventeenth Century*, Harper & Rowe, 1956¹⁾, p.294の引用から。
- 4) これらは1篇を除いてすべて、聖学院大学図書館所蔵のマイクロフィルム版Thomason Collectionを用いて入手したものである。例外の1篇はマイクロフィルム版にもれていたものを別刷りで入手した。マーシャルの議会説教はこれら以外に9篇あることが知られているが、内1篇はThomason Collectionのマイクロフィルム版からもれていて筆者はまだ入手していない。他の8篇は議会により出版を求められなかったが、その内の1篇は1657年にGiles Firminにより出版された。
- 5) DNBはじめ多くの歴史書、伝記に引用されるこの有名な言葉は、元来はJeremiah Burroughsについて言われたものだったように思われる。James Reid, *Memoirs of the Westminster Divines*, 1811¹⁾, J.R. Beeke & R.J. Pederson, *Meet the Puritans*, Reformation Heritage Books, 2006
- 6) 当時の神学用語ではapplicationのほか、ほぼ同義でuseが用いられていた。筆者はuseを用益と訳すこととする。
- 7) A Peace-Offering to God
- 8) Reformation and Desolation
- 9) Meroz Cursed
- 10) ΘΡΗΝΩ ΔΙΑ, The Church's Lamentation for the Good Man his losse
- 11) The Song of Moses, the Servant of God, and the Song of the Lambe
- 12) A Sacred Panegyricke
- 13) A Divine Project to Save A Kingdom
- 14) この間の事情については本論文冒頭のTrevor-Roper, Wilsonの著書を参照。
- 15) God's Master-Piece
- 16) The Strong Helper or The interest, and power of the Prayers of the destitute, for the building of Sion
- 17) A Sacred Record to be made of God's Mercies to Zion

長期議会における宗教と政治—スティーヴン・マーシャルの議会説教の分析を中心に

- 18) A Two-edged Sword out of the Mouth of Babes
- 19) The Right Understanding of the Times
- 20) エラストス主義の立場を取る議会と神学会議内外の牧師、神学者たちの対立については、田中浩『ホッブズ研究序説—近代国家論の生誕』（1982¹、改訂増補版、御茶の水書房、1994、1982¹）に「宗教権力は、世俗的権威（主権）よりも優位にあり、また、前者は、後者よりの干渉をうけることはできないというカトリック（ジェズイット）や長老派の主張…」（236頁、253頁）と説明され、他の研究者たちの多くもこうした見解を取るが、こうした理解はホッブズの見方をそのまま受け入れたものであって、きわめて偏っている。当時の「長老派」の立場は本論文の本論「マーシャルの説教内容の分析」およびウェストミンスター信仰告白23章、31章などに明らかなごとく、カトリック（ジェズイット）とは全く別である。こうした誤解はエラストス主義と「長老派」およびスコットランド教会による反エラストス主義の対立、論争への誤解ないし偏見から生じるとと思われる。
- 21) 特別な説教題はなく、ただA Sermon Preached to The Two Houses of Parliamentと題されているのみである。
- 22) この説教にも題はなく、A Sermon Preached to the Honourable House of Commons Assembled in Parliamentと題されているのみである。
- 23) Emmanuel : A Thanksgiving Sermon Preached to the Honourable House of Commons
- 24) The Sinne of Hardnesse of Heart : The Nature, Danger, and Remedy of it
- 25) A Thanksgiving Sermon
- 26) この事実からTrevor-roperやWilsonはマーシャルが国王処刑を支持していたことを示すとするが、DNBはそうではなかったとする。いずれにしても判断は推測の域を出ないが、筆者としては支持ではなく黙過だったのではないかと推察する。
- 27) この間の事情についてはWilsonに詳しい。
- 28) The Unity of the Saints with Christ, and especially among themselves
- 29) 注20に詳述したように、長老派聖職者が議会をコントロールしたり、議会大権を侵害するなどということはありませんでした。
- 30) Wilson, op cit, pp.12-13からの引用。
- 31) 印刷された説教の扉にマーシャルが用いた肩書は、「B.D. エセックス州フィンチングフィールドの牧師（Minister）」、「B.D. エセックス州フィンチングフィールドの神の言葉の牧師」、「B.D. エセックス州フィンチングフィールドの牧師（pastor）」、「B.D. エセックス州フィンチングフィールドの福音の牧師」などであった。
- 32) この意味では、従来ピューリタニズムにおける教派、分派の誕生とそれら相互間の抗争の歴史に論者の主な関心が集中していたが、エキュメニズムが肝要となった今日においてはピューリタニズムの時代においてキリスト者間の一致を目指した個人と運動の歴史により目を向けることが課題ではないかと思われる。